虐待 母も助け求める

我が子をたたく、ける、無視する――虐待に走るきっかけは何か。次第にエスカレートしていくのはなぜか。抑えられない怒りや苦しみを、子どもにぶつけた母親2人に聞いた。

（佐々波幸子）

首を絞めた 夫は見て見ぬふりだった

育児はすべて自分

東京都の主婦(48) 長男の小学校入学で転居。愚痴をこぼせる友人がいなくなった。次男が新しい幼稚園に通い始めて間もなく、先生から聞かれた。「前は自由な幼稚園だったんでしょうか。お遊戯をしないで、逃げていっちゃうんです」

通わせていたピアノ教室のレッスン中も走り回っていた。先生にキックしたりパンチをしたり。「なんでそんなことするの」。見ていてつらくなった。私がきちんとしつけなければ……。

「もっとちゃんとしなさい」と言いながらたたいた。最初は腕や足やおしり。たたくと手が腫れ上がるので、次第に足でけるようになった。二つ上の長男はけなげで、三つ下の末娘は幼く、手がかかった。虐待は、やんちゃな次男に集中した。

結婚して子どもができ、打ち込んでいた仕事を辞めた。「まだまだ出来たのに」。時折、思いが噴き出す。次男の首を絞めてしまったことも、1度ある。首周りがうっ血し、「まずい」と思った。青紫色の跡が引くまで、幼稚園を休ませた。

料理はすべて手作りだ。総菜を買ったことはない。夫は仕事が忙しく、子育ては妻任せ。首のうっ血に気づいていたと思うが、夫は見て見ぬふりを通した。

最初に相談したのは、都の教育相談室だった。電話をすると、優しい声で「大変だったわねぇ」。この言葉に救われた。地元の相談室に隔週で通った。しばらく手をあげなくて済んだが、次第にもたなくなった。

「あなたみたいな人が集まって話をするところがある」。相談室に聞いて、社会福祉法人「子どもの虐待防止センター」の自助グループを訪ねた。参加者の話を聴き、「私以外にも、子どもを殴ったりけったりする人がいるんだ」とびっくりした。

自助グループに参加して暴力は一時期減ったが、心の奥の怒りは収まらない。「このままでは殺してしまう」と、小1の正月から、児童養護施設に預けることにした。なんてひどい母親なんだろうと、自殺ばかり考えた。グループの仲間が通う心療内科に通い始めた。

治療を始めて、つらかった子ども時代を思い出した。理由もわからず親に怒られたりたたかれたりしたこと。自分が受けた心の傷を、次男にしてきたのだと、気づいた。「子どものころ、大事にされなかった」という思いから、みんなに心配される次男がうらやましくもあった。

次男が家に泊まる日を少しずつ増やした。その寝顔を「かわいい」と思えるようになった3年後、施設から引き取った。すんなりと戻れたわけではない。小学校では暴れ、中学は不登校に。だが、本人が一念発起して高校に入った。16歳の今、ようやく落ち着いた。

「私はだめな親なんだ、という思いでいっぱいだったけれど、最近になって、いろんなこと、無理しなくていいと思えるようになった」。心療内科には隔週で通う。月に2度は、旧知の相談員と電話で話している。

止めてほしいのに

東京都の主婦(39) 子どもは欲しくなかった。夫の気持ちを考えて「つくらなくては」と。出産後、我が子をかわいいと思えなかった。

「まず、子どもを抱きしめてあげてください」。テレビで流れる公共CMが、苦々しかった。「抱っこできないから、苦しいのに」と。

長男がおなかにいるころからつらかった。「子どもを産むと、一生責任を負わなければならない」という不安。

出産後は、実家に身を寄せた。「夕べ泣いてたね」と母や祖母から言われると、「泣かしちゃいけない」とプレッシャーを感じた。「お母さんは私の面倒をみてくれなかったでしょ」と、余計にイライラした。

長男はあやしても笑わなかった。おっぱいを飲むのが下手で吸い付かない。赤ちゃんは皆、上手におっぱいを飲めると思っていたので焦った。うまく出来ない赤ちゃんもいると助産師から聞いたのは、ずいぶん後になってからだ。

ベビーベッドに置くと泣くので、おなかの上に乗せて寝かしつけた。半年たち、添い寝に切り替えたときの楽だったこと！

夫は「おれは明日仕事があるから」と別の部屋で寝ていた。朝までぐっすり眠れる夫がうらやましかった。

産んだら「お母さん」になる。そう思っていたが、なんで泣いているのかも分からない。体をねじっておむつを替えさせてくれない我が子に、怒りがこみ上げてきた。子どもに当たってはいけないと、重ねたバスタオルをバンバンたたいた。

バチン！ ある時、じっとしないお尻に手がいった。何かが崩れた気がした。それからだ。糸が切れたようにたたき、怒鳴り出した。苦しくて、長男を連れてベランダから飛び降りようとしたこともある。だれかに止めてほしかった。

「私も子どもも助けて。とにかく助けてほしかった」

話を聞いてくれるところを探し、「子どもの虐待防止センター」につながった。自助グループで2年間、毎週つらい気持ちを吐き出した。それから約10年。苦しんでいるお母さんに伝えたい。「助けを求めることで、自分も子どもも救われます」

特別ではない

元児童相談所職員で日本社会事業大専門職大学院准教授の宮島清さんの話 この2人のお母さんは「特別な人」ではない。孤立、支援者の有無、心身の変調、経済的な問題など、いくつかの要素が重なった時、どんな人の身にも起こりうる。児童相談所の調査では、虐待している親の3割は止めてほしくて相談している。「非難されるかも」とためらいながら発しているSOSを、見逃さない目と協働が、学校や幼稚園、保育所、医師、福祉など受け手側に必要だ。

私たち市民にも、できることはある。子育てにしんどそうな親へのまなざしを変えること。大変ですね、と声をかけること。怒鳴り声や異変に気付いたときは、勇気を出して通報すること。自分自身の問題として行動していかなくてはならない。

◆虐待はひとごとでしょうか。感想や体験をメール（seikatsu@asahi.com）でお寄せください。

▲「子どもの虐待防止センター」で、相談に応じるスタッフ。「ひとりで悩まないでお電話を」と呼びかける

虐待防止に取り組む相談先の電話番号

全国子育て・虐待防止ホットライン
0570・011・077
平日10時～17時
土曜10時～16時

子どもの虐待防止センター相談電話
03・5300・2990
平日10時～17時
土曜10時～15時

児童相談所全国共通ダイヤル
0570・064・000

チャイルドライン
（18歳までの子ども専用）
0120・99・7777
月～土曜16時～21時

増加の背景「ひとりぼっち」？

子どもへの虐待が止まらない。刑事事件として立件された今年上半期（1～6月）の児童虐待の件数は181件で、統計を取り始めた2000年以降で最多だった。

7月末には大阪市のマンションで3歳と1歳の姉弟が遺体で見つかり、母親が死体遺棄容疑などで逮捕された。10月上旬には広島市の母親が4歳と1歳の姉弟を絞殺した容疑で逮捕。「子育てに疲れた」と話しているという。

「子育ては本来、『ひとけ』のあるところでするものなのに、『ひとりぼっち』のお母さんが多い」。子どもの虐待防止センターで母親たちの相談にのる野村一枝さんは言う。夫や親が身近にいても、「こんな私の気持ちはだれにも話せない」と思っていたら「ひとりぼっち」だ。

自分の気持ちを出せる場があれば、子ども時代に虐待を受けた経験があったり、夫との関係が悪かったりして不安定になった母親でも一線は越えない、という。

「助けを求めることができないのは、苦しくても子どものために我慢するのは当たり前という風潮がまだ社会にあり、親自身も縛られているから。自分を責めずに、周りに助けを求めてほしい」